

社会科学研究所 2018 年度春季実態調査（スリランカ）行程記録

飯沼 健子

はじめに

2018 年度の社会科学研究所春季実態調査は、スリランカを調査対象として 2019 年 2 月 28 日（木）～3 月 10 日（日）の期間に実施された¹。

本調査を行うにあたり、2004 年以来ジャフナで支援活動を行ってきた一般財団法人パルシックに訪問内容企画から調査同行までを依頼した。同団体の顧問でありスリランカ研究者である中村尚司先生およびスリランカ駐在経験のあるスタッフの西森光子氏が同行して下さり道中解説をして下さるという大変恵まれた実態調査となった。

本調査の企画段階で所員・参与に示された趣旨は以下の通りである。

「2009 年 5 月に 26 年間続いた内戦が終結したスリランカでは、2010 年以降高い経済成長率を持続しており、商業都市コロンボを中心に開発が進められている。しかし、主要産業は農業と縫製業に限られ、慢性的な貿易赤字に悩まされてきた。北海道の約 8 割という小さな島であるが、社会経済インフラが未整備である他、都市と農村など地域間格差があり、内戦で被害を受けた地域の復興や民族間の和解も道半ばである。こうした発展途上国の特徴を持つ一方で、独立後の早い段階から所得の再分配や福祉の充実など社会民主的な制度の確立に努めた稀有な国でもある。また、複数の古代王国の豊かな歴史遺産に恵まれ、内戦終結後は観光業も成長の兆しを見せている。更に、国際的な海上交通の要所にあることから、中国はじめ諸外国から経済的・軍事的に注視され海運事業が進むなど、国際海洋関係の動きも活発化しつつある。

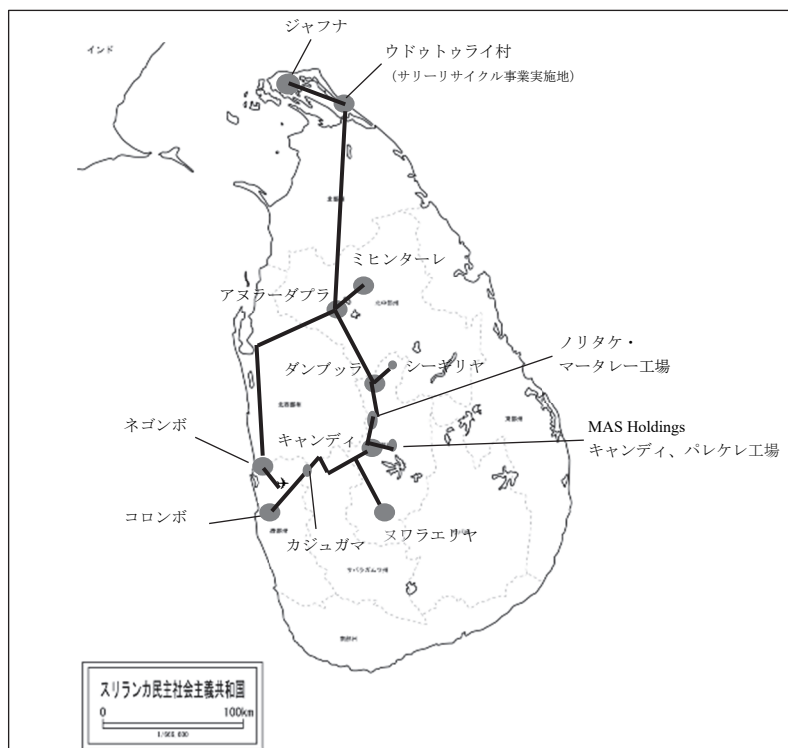
本実態調査では、変容期にあるスリランカの多様な側面を理解すべく、同国を北から南に縦断し、各地に残る歴史や文化に触れながら、内戦後の社会とその経済成長の実態および課題について調査を行う。

13～17 世紀に王国が栄えた北部州の州都ジャフナでは、内戦復興の話を知るとともに、ヒンドゥー教を中心とするタミルの文化に触れる。移動途中で縫製業の視察、ジャフナ大学訪問、NPO の支援による女性の収入向上活動の視察を行う。ジャフナから南下し、スリランカ

¹ 日本とスリランカの時差は 3 時間 30 分だけだが、スリランカへの直行便は週に 4 便だけということで、日程調整が難しく、また直行便の飛行時間は 9～10 時間程度と 1 日がかりの移動であり、実質的に往復移動に 2 日間はかかるため、実態調査としては長めの 11 日間という日程を組むことになった。

最古の都があったアヌラーダプラ（アヌラーダプラ王国：紀元前4～紀元11世紀初）では仏教寺院と古代王国の繁栄を支えた溜池を見学する。シーギリヤでは、世界遺産として有名なシーギリヤロックを訪問するとともに、世界的に著名なスリランカ人建築家ジェフリー・バワが設計したヘリタンス・カンダラマ・ホテルに宿泊する。イギリスによる植民地支配まで王朝が栄えたキャンディ（キャンディ王国：15世紀末～19世紀初）では仏歯寺を訪問し、そこから30 km程に位置するマータレーで、日系企業の例としてノリタケ社の工場を視察する。ヌワラエリヤではスリランカ第2の輸出品である紅茶のプランテーションを訪問する。商業都市コロomboでは、中国資本による大規模港湾開発の現場や日本の尾道造船のグループ会社 Colombo Dock yard（船舶造修所）を訪問するとともに、現地で長年にわたり中小企業（宝石加工業）および社会的企業（視覚障がい者による指圧施術店）活動を営む2人の日本人からスリランカ社会とビジネスの変遷について話を聞く。更に、スリランカ経済の専門家とトロツキー主義政党の国会議員から講義を受け、スリランカの社会経済状況とその変容についての理解を深める。」

実態調査訪問地の地図



出所：バルシック提供。

スリランカの北端まで一気に移動した後徐々に南下しコロomboまで各地に立ち寄りながらの調査で、2009 年内戦終了から 10 年が経つスリランカ各地の現状を知り得る極めて密度の濃い内容となった。以下はその概要の記録である。

実態調査の行程記録

第 1 日目：2 月 28 日（木）成田空港からコロombo経由ネゴンボへの移動

午前 9 時に成田空港のカウンター前集合後、各自チェックインを済ませる。スリランカ航空 UL455 便で成田空港を 12:05 に出発し、飛行時間約 10 時間後、現地時間 18:30 にスリランカのバンダラナイケ国際空港に到着した。出発は 45 分遅れ、到着は 1 時間 20 分遅れであったにも拘らず、到着ロビーでは現地の旅行代理店の職員とガイドの方が鮮やかな浅紅色のプルメリアの首飾りを人数分用意して一行を待っていて下さった。バンダラナイケ国際空港はコロomboから北へ 35 キロ程の場所にあり、翌日ジャフナ訪問を目指すため、空港より少し北にあるネゴンボへ専用バスで移動し宿を取った。19 時に Paradise Resort Hotel 着後すぐにホテルのレストランにて夕食を取りおおよび結団式を行った。

第 2 日目：3 月 1 日（金）ジャフナへ移動、ジャフナ大学訪問

翌朝ホテルの目の前にはインド洋が広がっていた。ネゴンボを 7 時半に出発し、スリランカ最北のジャフナに向けて、今回の旅程では最も長い 360 キロ余りの移動を開始した。

スリランカは仏教国として名高いが、道中車窓から見える町々の様子は、確かに仏教寺院や仏塔は多いものの、ヒンドゥー教寺院、イスラム教モスク、キリスト教教会も見かけ、人々の様子も民族的に多様であることが視えた。途中お茶の休憩をはさみつつ、また検問のためか突然車を止められたりしながらもひたすら北上した。13 時に昼食場所に着き、遠方にアヌラーダプラ、ミヒンターレを眺めながらスリランカ料理を楽しんだ。

ジャフナ半島にさしかかる所にエレファント・パスと呼ばれる場所があり、16 時に休憩を取った。ジャフナにいく交通の要所で、白壁の立派な鉄道の駅がある。車を走らせ丸一日がかりの移動を終えジャフナ大学に到着したのは 17 時過ぎ、かろうじて夕陽が残っている時間となった。予定の時刻より 1 時間以上も遅れてしまったが、ジャフナ大学の先生方は一行を忍耐強く待っていて下さった。



ジャフナ大学

「スリランカ北部社会の変容と現在」というテーマで、ジャフナ大学社会科学の R. Rajeskannan 先生と S. Jeevasuthan 先生よりご講義を賜り、その後質疑応答を行った。1983-2009 年という長期間続いたスリランカの内戦は、LTTE 側と政府側あわせて 20 万人もの死者を出し、夫を亡くし女性が世帯主となった 10 万世帯、障がい者となった人は 3 万人と悲惨さは語りつくせない。復興は道半ばだが、紛争後のシナリオ、和解のためのイニシャティブとその影響、現在の課題について説明して下さった。紛争に影響を受けたコミュニティの人々が早く安定した生活を送れるようになることが優先されるべきであるが、支援スキームでは住宅支援の対象者の選択基準があやふやで住宅も足りないこと、支援の調整・モニタリング体制もないこと、12,000 人の元 LTTE メンバーが 1 年間のリハビリテーション期間を経て家族のもとへ帰ったが働くためのスキルがなく支援も就業提供されていないなど、政治社会的状況に由来する多数の困難があることが現状である。

深く考えさせられた最初の訪問先ジャフナ大学を後にして 30 分程で Fox Resorts Hotel に到着し、19 時半よりホテル内で夕食を取り長い移動の 1 日を終えた。

第 3 日目：3 月 2 日（土）ジャフナ見学

午前 9 時にホテル出発、ジャフナのタミル人スタッフの方が乗車し、同氏と中村先生の説明を車中で聞きながら、仏陀が訪れたと言われるスリランカ北端の島ナーガ・ディーパに向けて出発した。9:50 に船乗り場に到着、両側に広がる海を眺めながら埠頭を徒歩で 10 数分歩き、船着き場までたどり着く。長い列で待ち 10:30 に乗船。木製の渡し船に現地の参拝者たちと一緒にぎゅうぎゅう詰めに押し込まれ、20 分間かけて島に到着した。

まず島に向かって左側の仏教寺院、ナーガディーパ・ヴィハーラを訪問した。仏陀はスリランカを 3 回訪れたが、その 2 回目にこの島を訪れたとされる。次に一直線の長い舗装道路をヒ

ンズー教寺院まで歩くと、やがて色とりどりの建造物が見えてきた。正面に回ると海に面して巨大で彩り豊かな塔門（ゴプラム）がそびえている。それはヒンドゥー教の女神を祀ったナーガ・プーシャニ・アンマン寺院である。

14時からの遅めの昼食後、ヒンドゥー教の聖なる水辺であるキーリマライを訪れた。キーリマライ村は内戦中の1990年に完全に破壊され、2012年に再建されたという。キーリマライの泉は海の隣にあるにも拘らず、その湧き水は淡水で、ここで水浴びをすると病気が治ると言われている。



ナーガ・プーシャニ・アンマン寺院の塔門



キーリマライの聖なる泉

夕方17時頃、地元の人々に親しまれているアイスクリーム店Rioで休憩後、重要なヒンドゥー教寺院であるナッルール寺院で、参拝者で賑わう寺院内と夕陽を受けて黄金に輝く塔を見学した。

続いて、ジャフナ図書館へ。この図書館は植民地支配と内戦の歴史そのものである。英国支配下の1933年設立され、内戦前は9万冊の所蔵図書があったが、1981年シンハラ人過激派により建物と蔵書を焼き払われた。

日が暮れかけてきたが急ぎジャフナ・フォートを見学した。ポルトガルは14世紀以来続くジャフナ王国を侵略し、1618年にこの要塞を築いた。しかしオランダの攻撃を受け1658年陥落、オランダはこの要塞を拡張・強化し現在の星形にしたが、1795年に英国の支配下に入った。1948年独立以降スリランカ政府軍の下に置かれ、内戦中はLTTEが拠点として用いた。スリランカがたどった凄まじい歴史の縮図の様な場所である。幸いそんな歴史は過去のものとなり、暑さが和らぐ夕暮れ時のせいか、多くの人が要塞からジャフナ港を眺めたり散策を楽しんでいた。



ジャフナ・フォート

日が暮れてからジャフナ市場を見学した。野菜、果物、乾物、菓子類、玩具、地元の産物から消費財まで、殆どの生活用品はここで手に入りそうだ。21 時過ぎに夕食を終え、ホテルに戻った。

2 泊に渡り宿泊した Fox Resorts Hotel は、元々ジャフナの有力な一族の邸宅であったが、タミル・イーラム解放のトラ（LTTE）により占拠され、弾薬庫用の地下室が造られるなどした。後にスリランカ政府軍に占拠され、内戦中は事務所として使用された。内戦終結後は、本来の所有者一族の手によりブティックホテルに生まれ変わった。弾薬庫だった地下室は、現在はギャラリーとなり絵画が展示されているが、壁には戦闘の痕跡が残る。

第4日目：3月3日（日）ジャフナ県「サリーリサイクル事業」およびアヌラーダプラ県

朝 8 時半にホテルをチェックアウトし、NGO パルシックが支援し女性の生計向上を目指す事業「サリーリサイクル事業」が行われたジャフナ県ヴァダマラッチ郡ウドットゥライ村に向けて出発した。同村は、2004 年スマトラ島沖大地震によるインド洋大津波の被害を受けた沿岸部の漁村である。ジャフナ市内でこの事業に詳しい元パルシックのスタッフであった日本人の方とパルシックのタミル人スタッフが乗車した。未だ内戦の爪痕も多く、9:45 頃には地雷が残る地域の湿地帯を越えて進んだ。やがて海岸に出て海沿いの道を移動中、車内で津波の説明を聞いていると海軍の車両に止められる。その大型バスではこの先の道は通れないと言われ、代わりのバスに乗り換えることになった。これで半日位は足止めかと思いきや、30 分という驚きの速さで地元の中型バスと運転手がやってきた。近隣ネットワークのおかげで迅速に手配できたようだ。



サリーリサイクル活動の女性たちと

無事にウドットゥライ村に到着し、「サリーリサイクル事業」の参加者たちを訪問した。スリランカの女性たちが身にまとうサリーは、特に都市部の富裕層などは何着も持っていないながら 1 度しか着ていないサリーも多い。これを寄付してもらい農村の女性グループが巾着など小物や簡単な洋服に仕立てて都市部の販売拠点に出荷してきた。一行は女性グループのリーダーの家の庭先にお邪魔し 8 名の女性たちに聞き取りを行った。内戦と津波の被害を被ったこの漁村では収入を得る手段が限られている。女性たちは恥ずかしそうにしながらも自己紹介をして、この事業を通して裁縫技術を学び収入を得ることでどのような変化があったかを語ってくれた。

12 時過ぎに村を出発、間もなく元のバスに乗り換え、ジャフナ県からアヌラーダプラ県へ向けて移動する。これで北部のタミル文化圏とはお別れである。短い間にタミル文化に何度も触れることができ、豊かな歴史文化の一方で、内戦や津波に破壊された生活の基盤を立て直すために未だ苦闘している様子を知ることができた。北部の着実な復興を願うばかりである。

16:15 にシンハラ王朝の王都であったアヌラーダプラに到着し、ここから仏教圏のスリランカを巡る。紀元前 247 年アショカ王の娘がインドから持参した菩提樹の寺であるスリー・マハー菩提寺、ロック・テンプルと呼ばれるイスラムニヤ精舎など偉大な仏教寺院と仏塔の数々をよく歩きよく登り 18 時頃まで見学した。特に白亜の巨大な大塔ルワンウェリー・サーヤ大塔には、国内だけでなく海外からもお袈裟をまとった僧侶の団体や多くの参拝客が集まり、仏教の中心地の風格を放っていた。日が暮れてから 2 泊する Palm Garden Village Hotel に到着した。

第 5 日目：3 月 4 日（月）アヌラーダプラ県ミヒンターレ郡

午前中はミヒンターレで古代王国の灌漑設備と仏教寺院を見学した。ミヒンターレはスリランカで最初に仏教が伝わった場所と言われ、正式名称はラジャマハー・ヴィハーラ寺院である。アヌラーダプラの王が仏教に帰依したことで、一気に王国中に仏教が広がることになるその中

心地だ。ここで周囲の平地の緑に白さが映えて美しいマハー・サーヤ大塔に、次に長い階段を経てアムバスタレー大塔に登った。日中の日差しで熱くなった岩を裸足で歩くことは一種の修行のようであるが、だからこそ頂上に達した時の達成感も一層大きい。

アヌラーダプラ県ミヒンターレ郡イハラガマ村はじめ、近隣の村落であるブドックラマ村、スルックラマ村など、かつて中村尚司先生が調査を行った灌漑設備のある村を訪問する予定であった。しかし、舗装はされているものの農村の狭い道路に対してバスのサイズは大きすぎて、到達は難しいことが判明し見学をあきらめざるを得なかった。

なんとかレストランを探していただき昼食休憩を取った。Palm Garden Village Hotel まで移動後、各自休憩と自由行動の時間を取った。

現地ガイドの熱心な勧めにより、野生動物公園 Wilpattu National Park を希望者だけで訪問した。ジープで森林の中の道を走り、運が良ければ近くを通る野生動物を車上から静かに見るというものだ。入口を入り色鮮やかな孔雀で感動していた一行は完全な初心者であった。ジープの運転手はもちろんガイドも、この先にもっと多くの大物がいることを知っていた。腕利き運転手と野生動物図鑑まで持参したガイドのお蔭で、レオパード、クマ、象、ワニの他に、アジアンパラダイスフライキャッチャーやスリランカにしかない希少動物の数々を見ることができた。近隣の村に住む運転手にとっては、この公園の象が村まで来て荒らすことが悩みの種だと言うが、野生動物の習性を知り尽くしている様子だった。

第6日目：3月5日（火）アヌラーダプラ県

スリランカ最古の都があったアヌラーダプラを見学した。かつて大乘仏教の総本山があったアバヤギリ大塔を仰ぎ見てから、紀元前1世紀にワッタガーマニ・アバヤ王により造られた僧院跡を見学した。僧院の食堂跡にある説明書きによると、中国の東晋時代の高僧法顕（ほっけ



僧院の食堂跡

ん) が 5 世紀にこの僧院を訪れた際 5,000 人の僧侶が暮らしていたと書き残しており、19m の石の器は 5,000 人分以上の食事を入れられること、この食堂には日時計、台所、貯蔵室、地下を通り建物に水を供給する設備まで備わっていたという。

続いて 4 世紀のサマーディ仏像、僧侶たちが沐浴をしたクッタム・ポクナ (Twin Ponds) をぐるりと回り、シンハラ王朝時代の宮殿跡ラトナ・ブラサーダと、王妃の建物跡に残るムーンストーン・サイトを見学した。

正午から 40 分間シーギリヤのレストランにて昼食休憩後、日本の無償資金協力で 2009 年に建設されたシーギリヤ博物館を訪問し、余力のある参加者はシーギリヤ・ロックに登った。下山するともう 16 時であったが小さな茶屋のような場所のチャイ (ミルクティ) に救われた。16:20 バスにて出発し、途中 16:40 にアユールベータ施設に行く一部の参加者は下車し、一行はダンブッラにあるジェフリー・パワ設計によるホテル Heritance Kandalama Hotel に 17:50 に到着し、ホテルレストランで夕食を取った。

第 7 日目：3 月 6 日 (水) マータレー県のノリタケ社およびキャンディ県の縫製工場訪問

早朝からホテルのテラスに来る野生の猿たちを観察して、8:30 にホテルを出発しダンブッラを後にした。10:10 にマータレーのノリタケの工場に到着し視察訪問を行った。先ず「ノリタケの歴史、スリランカへの進出、現状」の講義を拝聴し、工場見学で詳しく拝見した後質疑応答、そしてアウトレットで買い物もした。スリランカの日系企業の代表格であるノリタケは 1972 年にスリランカ政府系公団との合併事業として進出し、Lanka Porcelain Limited を設立して以来、安定的な発展を遂げてきた。同社の事業詳細については本号の石川論文を参照にされたい。

13 時にマータレーからキャンディを目指して出発した。14 時半頃 MAS Intimates 社 Linea Clothing 工場に到着した。同社は主要な輸出産業である縫製業の中でも代表的なグローバル企業である MAS Holding 社の子会社である。到着すると社員食堂に通され昼食のご馳走にあずかった。昼食代は支払わせて欲しいと申し入れたが、社員にとっても昼食は無料で来客も同様とのことでありがたく頂いた。企業概要を聞く前に、この食堂の食事の質の高さに同社がただモノではないことが視えた。工場内も拝見した後 DVD を視聴し、日本に留学経験のある社員から流暢な日本語で事業説明を受けた。詳細については本号の飯沼の拙稿を参照されたい。

16:45 に同社を出発し、17:40 頃キャンディ市内を通過する際、世界遺産である仏歯寺を移動の車中から眺めた。道中カシューナッツの産地として知られる村を通ったため、道路脇のカシューナッツ販売店に立ち寄った。その名もカジュガマ (Kajugama)、つまりカシュー (kaju) の村 (gama) という意味である。

ヌワラエリヤが近くなるとずっと山道が続いたが、漸く 20:40 にヌワラエリヤの Black Pool

Hotel に到着した。

第8日目：3月7日（土）ヌワエリヤ県の紅茶農園訪問、コロンボへ移動

前日山道を延々と上ってきたためか大型バスの調子が悪くなり、ホテルを出発できないまま待機した。結局バスを変更し 9:30 に無事出発した。手配できたバスは中型で、車内は荷物と人がすし詰め状態での移動となった。



紅茶園の風景



Pidurutalagala Tea Factory

丘陵地帯に広がる緑の紅茶園を眺めながら工場を一般に公開している Pidurutalagala Tea Factory を訪問した。紅茶工場のフロアを見学用の窓から見ながら、手慣れた様子の工場のガイドから紅茶生産の行程について説明を受けた。その後お茶の試飲コーナーで休憩、買物もした。紅茶園の歴史的考察については、本号の宮寄論文を参照されたい。

紅茶園を後にヌワエリヤを出発し、コロンボへ向かった。18 時頃コロンボに着き直接向かったのは、視覚障がい者の就労支援事業を行う社会的企業 **Thusare Talking Hands** である。経営者の石川氏は、スリランカでは馴染みのない指圧を現地に紹介し、視覚障がい者を指圧師として訓練し自立して生計を立てていけるように支援している。まず指圧師から参加者が指圧体験をした後、石川氏から「**Thusare Talking Hands** のスタート～今」というレクチャーを受けた。スリランカの視覚障がい者は偏見にさらされ就労機会もないが、専門的な指圧スキルを正確に習得したことが自信となりつつある様子が、短い指圧体験ではあったがうかがえた。同企業の設立経緯など詳細は飯田論文を参照のこと。

コロンボ市内の **Grand Oriental Hotel** に到着したのは 21 時となった。かつてオランダ総督の公館があった場所に 19 世紀に建てられたホテルで歴史を感じさせる上に、コロンボ港と船渠を眼下に見下ろせる。

第9日目：3月8日（金）コロンボ大学にて学術交流および日系宝玉石業訪問

コロンボ大学にて複数の講義を受けた。先ずコロンボ大学元学長 W. D. Lakshman 先生による講義「スリランカの経済」を受けた。スリランカの経済政策の転換点は、経済開放政策を導入した1977年であった。2010年代末を迎え、30年間の自由主義経済政策が何をもたらしたか検証すると、構造的な改革はできておらず、持続的な成長も達成できないという現状を認識すべきだとする。スリランカが上位中進国になるためには、農業・工業を中心に適切な政策を通じて所得向上を図る必要があり、また所得を分かち合いより包摂的で平等な発展を構築すべきだとする。長期間続いた新自由主義的な政策を転じて、自国内のニーズにあった新たな政策枠組みが必要だとしている。明確で力強い講義に続き活発な質疑応答が行われた。

10:10にはお茶、12:00にはスリランカ料理のケータリングを手配していただき、学内で昼食休憩を取った。コロンボ大学からは複数の研究者が参加下さり、有益な交流が行われた。

次に、トロツキー主義についての講義で、実際にトロツキー政党に属する B. Shanthakumar 氏がお話下さった。スリランカのトロツキー主義政党は1935年に設立された。一時期は、マルクス主義、毛沢東主義、など左派が主流の時があった。その後、世界中のマルクス主義、つまり各国の共産党は、いずれもトロツキー主義を追放したが、スリランカのマルクス主義は、世界で唯一スターリン主義を追放した。社会主義はスリランカ社会に浸透しなかったが、平等主義はスリランカ社会に深く根付いた。



コロンボ大学構内



コロンボ大学にてご講義を受ける

トロツキー主義をどのような階層の人が担ったのかというと、スリランカ社会の主なリーダーは外国で教育を受けた裕福な人々であったが、スリランカのトロツキー主義の設立者は中流階級で生まれ育った人々だった。またスリランカの共産党の設立者のうちの1人は仏教の僧侶だった。マルクス主義は近代化運動でもあり、より進歩的でより公正な近代化であるとする。

こちらでもスリランカでしか学べないテーマで多くの質問が出された。

コロンボ大学を後にし、時間が限られた一行を夕刻 18 時から受け入れて下さったのは、スリランカで宝石加工・販売を行う日本人起業家の大槻氏である。スリランカ人職人を養成し、質の高い宝石商品を生産し、現地での販売の他、日本の **Jewelry Motherhouse** にも出荷している。事業概要の説明の後、工房見学、質疑応答を行い、実際に同社の宝石店を見学した。その後 20 時頃から大槻氏を囲み夕食を取った後、**Grand Oriental Hotel** に連泊した。

第 10 日目：3 月 9 日（土）尾道造船グループ訪問、博物館見学

10 時より尾道造船グループの **Colombo Dock Yard** 社を訪問した。先ず事業説明をいただき、バスに乗り込み船渠まで行き巨大な船舶などを間近に見学した。尾道造船は 1993 年にスリランカに進出し現地企業との合併で **Colombo Dock Yard** を創業した。スリランカに進出した理由は、ここしかないからという明確な理由による。詳細は本号の樋口論文を参照されたい。

11 時半頃同社を出発し、コロンボ国立博物館を見学した。先史時代からこの島の歴史を辿り、本調査で駆け巡った北部からコロンボまでの訪問先からの出土品などをあらためて鑑賞できた。また灌漑設備に関する展示では中村先生に説明をいただき、現地村落の訪問はできなかったものの、灌漑システムの仕組みが分かり、技術の高さがうかがえた

昼食にはレストラン **Dutch Bergher Union** にて **Lump Rice** をいただく。**Dutch Burgher** とはオランダ・ポルトガルのバーガー・スリランカの混血の子孫のことだという。バナナの葉に包まれた複数のカレーや魚の団子と揚げた卵とご飯は絶妙な組み合わせであった。

その後一端ホテルに戻り、15 時にはホテルを出発し空港に向かった。19:15 に **UL454** 便にてコロンボを後にした。

第 10 日目：3 月 10 日（日）帰国

翌朝 7:30 に成田に無事到着し解散した。

おわりに

本研究所にはスリランカの専門家はおらず現地の情報や知識も限られていたが、スリランカの実に多くの側面を学べる実態調査を行うことができた。これもひとえにパルシックのご協力を得られたお蔭である。中村尚司先生は現地のバスの中あるいは現場で一行に対して多くのご説明を下された。西森氏は、計画段階から所員の多様な関心の一つ一つに応える形で、現地側

との調整・連絡で多大な労力と時間をかけて極めて意欲的な調査日程を組んで下さった。お二人のご協力に、この紙面をお借りして厚く御礼申し上げたい。また、日本人・スリランカ人のパルシック関係者の方々からも大変心強いご協力を賜り、深い感謝を表したい。

そして現地渡航中に、一行の限られた日程と時間にも拘らず、訪問受け入れをご快諾下さった多くの方々に深く感謝申し上げたい。訪問先で賜った多くの知見はまだすべてを消化できないうちに本号の発行を迎えたが、今後の問題意識として研究の糧にしていきたい。

一行が帰国して1か月余り経った2019年4月21日、スリランカで大規模な同時多発テロが発生した。今回の訪問先や関係者の方々に安否を尋ねたところ、大変残念なことに今回視察させていただいた縫製工場 MAS Holdings 社の女性従業員1名とその方のご家族がテロの犠牲になってしまったという。

今回のテロの犠牲者の方々のご冥福を心よりお祈り申し上げたい。